

東京工芸大学紀要表紙コンセプト

色の考え方

廣村正彰

人に備わる五感の中で視覚が全体の80%を占めると言われている。ほとんどの情報を視覚から取り入れて判断していることになる。

色も例外ではない。日本語には色を表現する言語が多く存在し、同じ赤系統を表す言葉でも「桃色」、「撫子色」、「紅」、「緋色」などがある。

それは、日本人が色によってものごとの判断や感情の表現をしてきたことで、色彩感覚が洗練され続けた日本人独特の文化である。

単色で表現された表紙のバリエーションは、日本人が感じてきた微妙な色の差を象徴し、東京工芸大学がより洗練された大学になっていくことを表現している。

現在、本学では「色の国際科学芸術研究センター」を厚木キャンパスに構え、色についての研究をメディアアートとして発表している。「色の大学」を目指す本学との相性もいいのではないだろうか。

色の選び方についても色相環に合わせて赤系、緑系、青系、紫系と使用することで、より色に対して向き合っていく姿勢を表現していくこともできるだろう。